高崎市文化財調査報告書第334集

# 柴崎屋敷遺跡

－宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２０１４

高 崎 市 教 育 委 員 会
有限会社 毛野考古学研究所

# 例　言

1.　本書は、宅地建設に伴う柴崎屋敷遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2.　本遺跡は、群馬県高崎市柴崎町屋敷564-1他に所在している。

3.　発掘調査および整理調査は、高崎市教育委員会監理のもと、委託を受けた有限会社 毛野考古学研究所が実施した。

4.　発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、高井俊夫氏に負担して頂いた。

5.　発掘調査の体制は、以下のとおりである。

　高崎市教育委員会文化財保護課　田口一郎・大野義人（監督員）

　有限会社 毛野考古学研究所　　浅間陽（調査）・設楽和也（測量）

6.　発掘作業は平成25年11月5日～平成25年12月2日、整理作業は、平成25年12月24日～平成26年6月30日の期間で実施した。

7.　本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「578」である。

8.　本書の執筆についてはⅠを高崎市教育委員会文化財保護課、それ以外を浅間が行った。

9.　本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。

10.　発掘調査・整理調査に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】

新井健吾　亀田浩子　川島隆好　久保安美　清水孝子　竹生正明

【整理調査】

内田恵美子　小野沢絹子　合田幸子　下條真美代　伴場りく　山口昌子

11.　発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏にご協力賜わった。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略、順不同）

田中建設　ＪＴ空撮　明総　カネコハウス　有限会社スミヤ測量　高井俊夫　伊藤明宏　墨谷正勝　鈴木徳雄

# 凡　例

1.　挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海抜標高を示す。座標は世界測地系（Ⅸ系）である。

2.　遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。また、遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。写真のみ掲載したものについては土器・ガラス製品を1/3、石製品を1/2、瓦を1/4におおよそあわせてある。

3.　土層および土器の色調観察・含有物の量は『新版　標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修　2006）にもとづいて記載した。

4.　遺構から出土した近現代の出土遺物については写真のみ掲載し、一覧表を作成した。

5.　本書掲載の地図は第1図が高崎市発行1/2,500「高崎市都市計画基本図」、第2図が国土地理院発行1／200,000地勢図「長野」・「宇都宮」、第3図は、国土地理院発行1/25,000地形図「高崎」である。

6.　遺構略称は、溝:SD、土坑:SK、ピット:P、攪乱:K、カクランとした。また、遺構図中Sは礫を表す。

7.　本書で用いたテフラの略号は、Ａｓ－Ａ…浅間Ａ軽石（1783年噴出）、Ａｓ－Ｂ…浅間Ｂ軽石（1108年噴出）、Ａｓ－ＹＰ…浅間－板鼻黄色軽石（13,000-14,000y,B,P噴出）である。

# 目　次


例言／凡例／目次／図表目次／写真図版目次

Ⅰ　調査に至る経緯……………………………… 1

Ⅱ　地理的・歴史的環境……………………………… 2

　1　地理的環境……………………………… 2

　2　歴史的環境……………………………… 3

Ⅲ　調査の方法と経過……………………………… 5

　1　調査の方法……………………………… 5

　2　調査の経過概要……………………………… 5

Ⅳ　基本層序……………………………… 6

Ⅴ　検出された遺構と遺物……………………………… 8

　1　遺跡の概要……………………………… 8

　2　溝……………………………… 8

　3　土坑……………………………… 19

　4　ピット……………………………… 20

　5　遺構外出土遺物……………………………… 21

Ⅵ　まとめ……………………………… 22

　1　Ａｓ－Ｂ降下以前の溝について……………… 22

　2　大下屋敷（柴崎東屋敷）について…………… 22

報告書抄録／奥付


# 図表目次


第1図　調査区位置図……………………… 1

第2図　遺跡の位置と周辺の地形………… 2

第3図　周辺の遺跡……………………… 4

第4図　基本層序……………………… 6

第5図　調査区全体図……………………… 7

第6図　SD-01・02、SD-01 出土遺物 …… 8

第7図　SD-03・09・10・11・17 ………… 9

第8図　SD-04・05、SD-04 出土遺物 ……11

第9図　SD-06……………………………13

第10図　SD-09 出土遺物 …………………14

第11図　SD-07・08・12～14 ……………16

第12図　SD-15・16・18～22 ……………18

第13図　SK-01～03・08 …………………19

第14図　P-02・11 …………………………21

第15図　大下屋敷縄張図 …………………23

第16図　大下屋敷推定範囲 ………………23

第1表　SD-01 出土遺物観察表 ……………10

第2表　SD-04 出土遺物観察表 ……………12

第3表　SD-05 出土近現代遺物一覧表 ……12

第4表　SD-09 出土遺物観察表 ……………15

第5表　SK-01 出土遺物観察表 ……………19

第6表　土坑一覧表…………………………20

第7表　P-11 出土近現代遺物一覧表 ……20

第8表　ピット一覧表………………………20

第9表　出土遺物集計表……………………21


# 写真図版目次


PL. 1　調査区遠景
　　　大下屋敷と調査地点

PL. 2　調査区全景
　　　1区全景
　　　2区東側全景
　　　2区西側全景
　　　3区全景

PL. 3　4区全景
　　　5区全景
　　　6区全景
　　　SD-01 全景
　　　SD-02 全景
　　　SD-03 全景
　　　SD-03 西側全景
　　　SD-03 Dラインセクション

PL. 4　SD-03・17 分岐点全景
　　　SD-04 全景
　　　SD-04 Bラインセクション
　　　SD-04 下層遺物出土状態
　　　SD-04 掘削痕近景
　　　SD-05 全景
　　　SD-06 全景
　　　SD07・12・13・14 全景

PL. 5　SD-08 全景
　　　SD-10 全景
　　　SD-10 セクション
　　　SD-11 全景
　　　SD-15・16 全景
　　　SD-19 全景
　　　SK-01 全景
　　　SK-02 全景

PL. 6　SK-03 全景
　　　SK-08 全景
　　　P-02 全景
　　　P-11 遺物出土状態
　　　P-11 礎石検出状態
　　　基本層序①セクション
　　　基本層序③セクション
　　　SD-04 調査風景

PL. 7　柴崎屋敷遺跡出土遺物

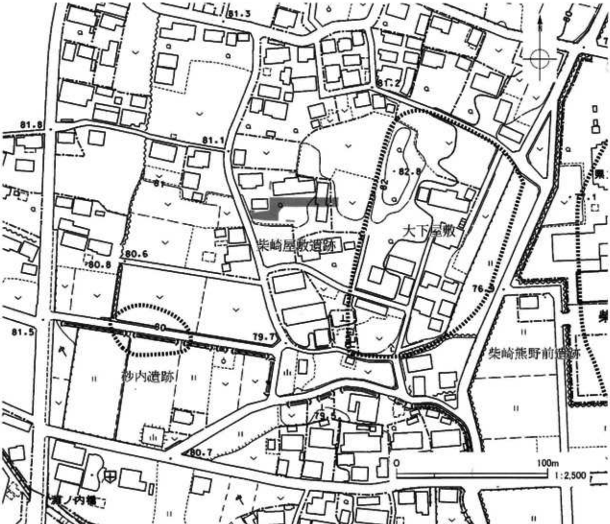
# Ⅰ　調査に至る経緯

平成 25 年 6 月、土地所有者の高井俊夫氏より高崎市教育委員会（以下市教委）に宅地分譲工事予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地であるため、試掘調査による確認を実施し工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

同年 7 月 2 日付けで事業者である有限会社阿久津都市開発より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年 7 月 24 日に工事予定地の試掘調査を実施し、古墳時代～中近世の遺構・遺物を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更は不可能ということなので、開発予定地の内道路建設部分について記録保存の発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成 25 年 10 月 17 日付けで高崎市教育長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 25 年 10 月 17 日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。




第 1 図　調査区位置図

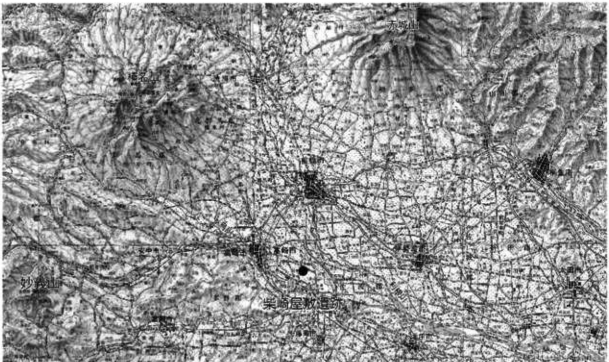
# Ⅱ　地理的・歴史的環境

## 1　地理的環境

高崎市域の地形は西から岩野谷（観音山）丘陵、高崎台地、井野川低地帯、前橋台地の４つに大きく区分することができる（前橋台地は井野川低地帯を境にして西側を高崎台地、東側を前橋台地と呼ぶことが多い）。柴崎屋敷遺跡をのせる前橋台地は主に約２万１千年前に浅間山から噴出した泥流堆積物（前橋泥流）を起源とし、その上には崩壊した火山堆積物が泥流となって再堆積したと推定されるＡｓ－ＹＰを含む軟弱な泥流堆積物が堆積している。この泥流は高崎泥流と呼ばれ、およそ１万１千年前に堆積したと推定されている。

前橋台地中央部を流れる井野川流域には低地帯が広がっている。この井野川低地帯は近年の圃場整備等の大規模な地形改変により、微地形を視認することは難しい。高崎台地との比高差は現況で約２ｍを測る。

遺跡地の周辺は起伏のある微地形を呈している。遺跡南側には谷が東西に入り込み、この谷には現在用水路が敷設されているが、台地を侵食する小河川であったと考えられる。また、本遺跡の東側は崖線となっており、井野川の旧河道に侵食され、崖線は約90°南へ折れ曲がる。地名に台地の先端などを意味する「崎」を含み、18世紀代の『田口文書』にも「柴崎」の地名をみることができる。台地縁辺部には小河川が南流しており、現在は用水路として利用されている。




第２図　遺跡の位置と周辺の地形

## 2　歴史的環境

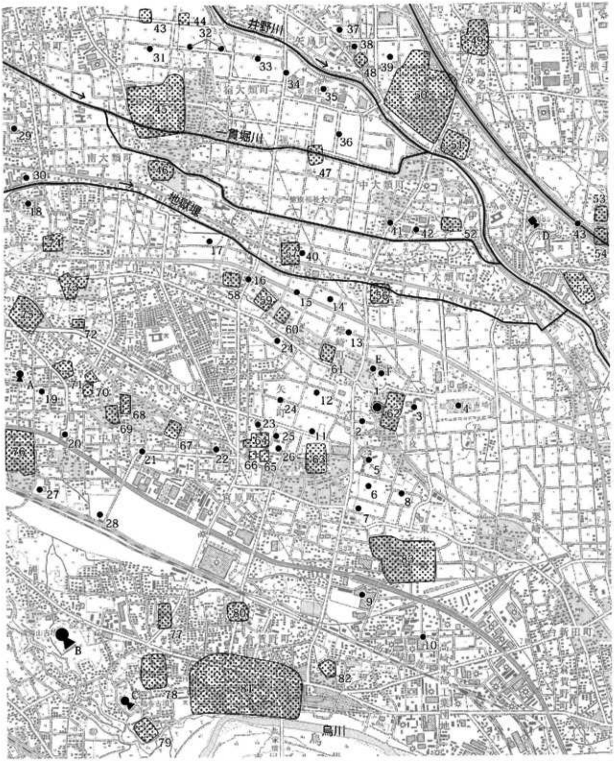
本遺跡周辺において弥生時代中期以前の遺跡形成は低調であり、弥生後期にいたり、高崎情報団地遺跡、鈴ノ宮遺跡、元島名遺跡等で小・中規模集落の検出事例が増加するものの、これらは基本的には井野川・一貫堀川近傍の自然堤防や微高地上に展開する弥生集落であり、一貫堀川の右岸から南西に幅約1kmの低地帯を挟んだ低台地上に占地する本遺跡とその周辺では依然として遺跡形成が低調なままであった。

このような状況の中、古墳時代前期には井野川左岸で前方後方型の元島名将軍塚古墳が築造されるのをはじめ、遺跡数の顕著な増加が認められる。本遺跡周辺でも三角縁神獣鏡が出土したと伝えられる蟹沢古墳や前方後方型を含む周溝墓群が検出された矢中村東遺跡、村東C遺跡等、古墳時代の初頭から古墳の築造が活発に行われており、墳墓域としての土地利用が主であったことが読み取れる。ただし、古墳時代中期以降、台地上の古墳の形成は減少し、より井野川の下流へと分布の中心地域が推移していくようである。

古墳形成が活発な一方で、高崎台地上では集落の形成は制限されていたようであり、明確な集落は検出されていない。本遺跡の東側に隣接する柴崎熊野前遺跡では住居跡が検出されていないものの、古墳前期〜中期の自然流路から水田耕作用の木製「大足」や多量の土器、木製品を含む玉類、貨泉などが出土したことから付近に当該期の集落が存在した可能性は高い。現状では古墳時代の集落は下大類遺跡、高崎情報団地遺跡等、井野川右岸近傍の低地帯に集中し、井野川から距離のある本遺跡周辺では平安時代に至るまで集落の形成は低調であったと判断される。

古代においては柴崎熊野前遺跡や宿大類遺跡でＡｓ－Ｂ降下以前の水田とともに10世紀代を主体とする集落が検出されており、このような集落が台地上や低地内の微高地上に多く確認できる。また、井野川右岸では条里地割に基づく水田が確認されており、天王前遺跡、柴崎前遺跡、矢中遺跡群において条里方眼の対角線上に掘削された幹線用水路を伴い、水溜め状の遺構に水を集めさらに下流への水量を調節していたことが判明している。これらの遺跡における用水路等の計画的な掘削から、古代には官主導と想定される水田開発が行われていたことが明らかになっている。

中世以降、柴崎町の付近では城館遺構が多数形成されていることは特筆される。本遺跡をのせる台地上でも大下屋敷をはじめ、進雄神社の周辺には高井屋敷や柴崎西浦屋敷など代々神社の神官を務めた高井家の屋敷跡が確認できる。高崎市東部から玉村町域まではこうした城館遺構が濃密に分布しており、それらの多くが16世紀に起源を持つことは上杉氏、後北条氏に武田氏を加えた三つ巴の争乱の渦中にあった当時の時代背景によるものであろう。このような城館遺構が本遺跡のある柴崎町では視認できる形で多数残存していることから、必然的にそれらを構成する地割も中世後期まで遡ることが可能であり、『高井家文書』や『田口文書』等の文献資料が残っていることも勘案すれば、中世以降の歴史を考える上できわめて豊富な情報量を有する地域と言える。




<周辺遺跡> 1. 柴崎屋敷遺跡 2. 砂内遺跡 3. 柴崎熊野前遺跡 4. 下大類遺跡 5. 矢中村東遺跡 6. 矢中村東B遺跡 7･8. 村東C遺跡 9. 中里前遺跡 10. 東条里遺跡 11. 下村北遺跡 12. 柴崎前遺跡 13. 村岡・富士塚前A遺跡 14. 東原・富士塚・富士塚前B遺跡 15. 新堀・桜際・吹手西A遺跡・富士塚B遺跡 16. 西浦・隼人・吹手西遺跡 17. 西神・柳原・吹手西B遺跡 18. 高関岡久保遺跡 19. 上中居島東師遺跡 20. 下之城村北Ⅱ遺跡 21. 下中居条里遺跡 22. 矢中村西Ⅰ遺跡 23. 宝昌寺裏遺跡 24. 村北A・天王前 25. 矢中村北C遺跡 26. 矢中村北B遺跡 27. 下之城村前Ⅱ遺跡 28. 下之城村東遺跡 29. 高関塚田遺跡 30. 高関東神Ⅱ遺跡 31. 天王Ⅱ遺跡 32. 村北・矢島前・村東遺跡 33. 山島・天神遺跡 34. 天神久保遺跡 35. 万福寺遺跡 36. 高崎情報団地遺跡 37･38. 鈴ノ宮遺跡 39. 元島名遺跡 40. 柴崎・隼人遺跡 41. 中大類金井遺跡 42. 中大類金井分遺跡 <中世城館> 43. 天田館 44. 村北屋敷 45. 大類城 46. 大類館 47. 堀ノ越屋敷 48. 鈴ノ宮屋敷 49. 島野環濠遺構群 50. 元島名城 51. 元島名内出屋敷 52. 降熊屋敷 53. 江原屋敷 54. 上滝中屋敷 55. 慈眼寺 56. 大類寄居屋敷 57. 隼人屋敷 58. 柴崎西浦屋敷 59. 高井屋敷 60. 柴崎桜井屋敷 61. 村関屋敷 62. 大下屋敷 63. 下村北屋敷 64. 宝昌寺裏屋敷 65. 栗原屋敷 66. 宝昌寺屋敷 67. 道場屋敷 68. 下中居佐藤屋敷 69. 下中居福田屋敷 70. 高尾屋敷 71. 下中居新井屋敷 72. 下中居環濠遺構群 73. 宇名室環濠遺構群 74. 丸茂屋敷 75. 新堀砦 76. 和田下之城 77. 上稲荷前屋敷 78. 倉賀野西城 79. 宮之前屋敷 80. 永泉寺の砦 81. 倉賀野城 82. 倉賀野東城 83. 東中里城<古墳>A. 稲荷塚古墳 B. 浅間山古墳 C. 大鶴巻古墳 D. 元島名将軍塚古墳 E. 蟹沢古墳 F. 浅間山古墳(柴崎町)

※石丸ほか2012に加筆修正。

第3図 周辺の遺跡

# Ⅲ 調査の方法と経過

## 1 調査の方法

発掘調査にあたっては鋤簾による遺構精査を行った後、各遺構について土層観察用のベルトを残しながら移植ゴテ・スコップを用いて掘削を行った。遺構確認は試掘時の確認面であったⅣ層上面で試みたが、遺構プランが視認できなかったことからⅥ層およびⅨ層を基本として行った（Ⅳ章を参照）。調査の進捗状況ごとに随時写真撮影を行い、平面図・断面図の作成もあわせて行った。遺構平面図の作成にはトータルステーションを使用し、断面図は手実測によって作成した。出土遺物はトータルステーションによって平面位置や標高を記録して取り上げ、微細な遺物に関しては可能な限り、簡易な出土位置を記録して取り上げた。写真撮影には35㎜判のフィルムカメラ（Nikon FM3：モノクロ・リバーサル）と1,200万画素相当のコンパクトデジタルカメラ（Canon PowerShot S110:1/1.7サイズ）を使用した。調査区全体の空撮にはラジコンヘリを使用し、6×7判のフィルムカメラ（モノクロ・リバーサル）と1,510万画素相当のデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS Kiss X3:APS-Cサイズ）を使用した。

整理調査にあたっては遺構図面に修正を加えたのち、各遺構ごとにAdobe illustrator CS2を用いてデジタルトレースを行った。出土遺物は洗浄・注記作業を行ったのち、遺構単位で土器を中心に接合作業および実測個体の抽出作業を実施した。接合にはセメダインCを使用し、必要に応じてアポキシ系樹脂により補強を行った。遺物の写真撮影には2,000万画素相当のデジタル一眼レフカメラ（Nikon D5200:APS-Cサイズ）を使用した。写真ファイルは各遺構ごとに整理し、Adobe Photoshop 6.0およびAdobe illustrator CS2を用いて縮尺の変更・写真の切り抜きを行った。写真撮影の完了後、遺物の実測・トレース作業を実施した。以上の手順によって作成した図面・写真・原稿をAdobe InDesign CS2によって編集した。

## 2 調査の経過概要

現地での発掘調査は平成25年11月5日～12月2日、整理調査は平成25年12月24日～平成26年6月30日まで行った。

(1) 発掘調査の経過

**平成25年11月5日**：重機（0.25バックホウ）による表土除去を開始（～9日）。**6日**：測量基準点打設作業。縄張り・スロープの設置など安全対策を実施。**7日**：調査補助員を動員し、遺構精査を開始（～14日）。並行して1区SK-01から掘削を進める。**8日**：中・近世の堀跡SD-04を掘削開始（～12日）。**18日**：河川跡SD-06の掘削開始（～26日）。並行して2区西側で検出された多数の溝を調査。**28日**：ラジコンヘリによる空撮を実施。基本土層確認用トレンチ掘削。擁壁部表土除去・調査。高崎市教育委員会による1・2区の完了検査を実施。一部器材撤収。**29日**：擁壁部（3～5区）の調査・完了検査を実施。**12月2日**：擁壁部（6区）の調査・完了検査を実施。すべての器材を撤収し、現地作業が終了する。

(2) 整理調査の経過

**平成25年12月24日**：遺構図の修正、出土遺物の水洗い・注記作業（～28日）。**平成26年1月6日**：遺構図の修正（～27日）、遺物の接合作業開始（～7日）。**2月7日**：遺物写真撮影・遺構図トレース開始の開始（～3月10日）。**12日**：遺物実測作業開始（～2月14日）。**17日**：遺物図のトレースを行う（～20日）**2月24日**：原稿執筆および編集作業を開始する（～4月30日）。**5月27日**：原稿を入稿し、以降、校正作業を行う。**6月30日**：印刷製本作業が完了し、納本を行った。

# Ⅳ　基本層序

基本層序は以下の11層に大別される（第4図）。

Ⅰ層：Ａｓ－Ａを含む現代の盛土・砕石層（Ia層）および耕作土（Ib層）。

Ⅱ層：Ａｓ－Ａを多量に混入する。耕作土か。

Ⅲ層：Ａｓ－Ｂを多量に混入する黒褐色土。Ａｓ－Ａが混入する上部層（Ⅲa）と混入しない下部層（Ⅲb）に細別される。本層上面でＡｓ－Ａを多量に含む復旧溝が確認できる（第9図）。

Ⅳ層：Ａｓ－Ｂを含まない黒色土。２区中央より西側や３～６区では水性堆積が観察される。

Ⅴ層：砂質土を基調とする。鉄分が凝縮されたブロックを多量に含み、非常に硬く締まる暗赤褐色土。色調により暗赤褐色を呈するVa層、黒褐色を呈するVb層に細別され、水性堆積が観察される。

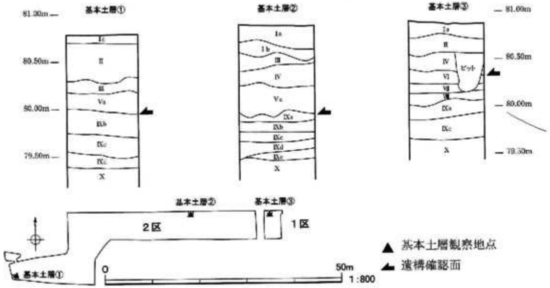
Ⅵ層：Ａｓ－ＹＰの上部ローム層。下部には撹拌されたＡｓ－ＹＰの一次堆積がブロック状に観察される。１区から２区東側でのみ確認された。

Ⅶ層：白色を基調とするＡｓ－ＹＰの一次堆積層。ユニットの一部か。

Ⅷ層：暗赤褐色を呈するＡｓ－ＹＰの一次堆積層で締りが弱い。ユニットの一部か。

Ⅸ層：黄灰色を基調とする粘質シルト層。洪水起源か。

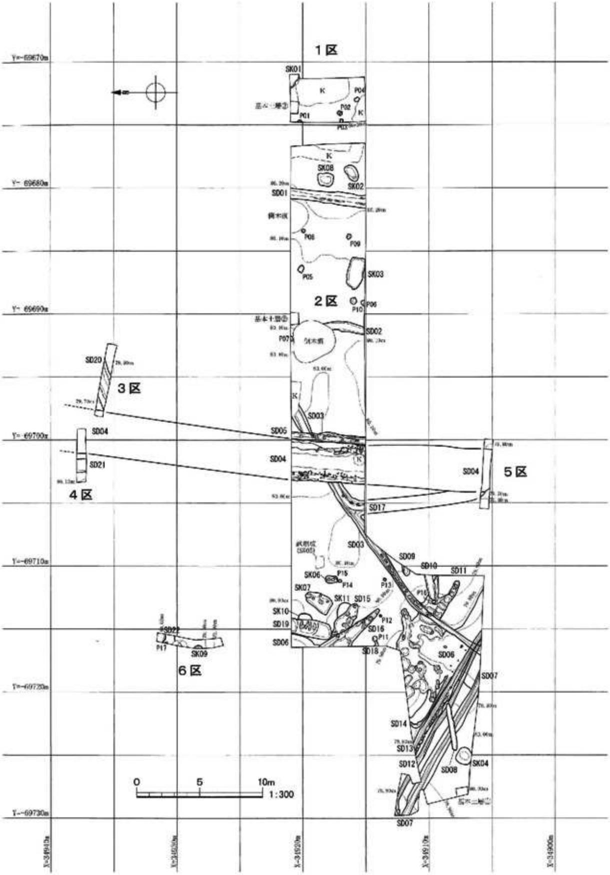
Ⅹ層：前橋泥流に伴う焼礫塊を多く含む灰黄色土層。




基本土層　土層説明

| | | |
|---|---|---|
| Ia | 褐灰色土（10YR6/1） | 締まり弱く、粘性強い。As-Aφ0.5～20cmのIX層ブロック多量含む。現代の造成土。 |
| Ib | 暗褐色土（10YR3/3） | 締まりやや弱く、粘性弱い。As-A多量含む。近現代の耕作土 |
| Ⅱ | 褐灰色土（10YR4/1） | 締まりやや弱く、粘性弱い。As-A多量含む。 |
| Ⅲ | 褐灰色土（10YR4/1） | 締まりやや弱く、粘性弱い。As-A・B多量含む。 |
| Ⅳ | 黒褐色土（10YR3/1） | 締まりあり、粘性あり。As-YP少量含む。耕作土か。As-B降下以前。 |
| Ⅴ | 灰褐色土（7.5YR5/2） | 締まり強く、粘性弱い。鉄分多量含む。洪水層。 |
| Ⅵ | 黄褐色土（10YR5/6） | 締まり強く、粘性強い。As-YP多量含む。ハードローム。 |
| Ⅶ | 明黄褐色土（10YR6/6） | 締まりやや弱く、粘性やや弱い。As-YPユニットか。As-YPの一部。 |
| Ⅷ | 暗褐色土（7.5YR3/4） | 締まりあり、粘性あり。As-YP中量含む。As-YPの一部。 |
| Ⅸa | にぶい黄橙色土（10YR7/4） | 締まり強く、粘性弱い。シルト質含む。洪水層。 |
| Ⅸb | にぶい黄色土（2.5Y6/4） | 締まりあり、粘性やや強い。シルト質含む。洪水層。 |
| Ⅸc | 浅黄色土（2.5Y7/4） | 締まりあり、粘性やや強い。シルト質含む。洪水層。 |
| Ⅸd | 黄灰色土（2.5Y6/1） | 締まりやや弱く、粘性あり。砂質含む。洪水層。 |
| Ⅸe | 浅黄色土（2.5Y7/4） | 締まりあり、粘性やや強い。シルト質含む。洪水層。 |
| Ⅹ | にぶい黄橙色土（10YR6/3） | 締まりやや弱く、粘性あり。φ0.5～20cmのIX層ブロック多量含む。φ0.5～10cmの焼礫中量含む。前橋泥流起源。 |

第4図　基本層序


1区
2区
3区
4区
5区
6区
SK01
SK02
SK03
SK04
SK06
SK07
SK08
SK09
SK10
SK11
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
P01
P02
P04
P05
P06
P08
P09
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P17
K
0
5
10m
1:300
Y=-69670m
Y=-69680m
Y=-69690m
Y=-69700m
Y=-69710m
Y=-69720m
Y=-69730m

第5図　調査区全体図

# V　検出された遺構と遺物

## 1　遺跡の概要

柴崎屋敷遺跡は井野川と烏川に挟まれた低台地上に立地する。今回の調査地点は上記低台地の東側縁辺部に位置し、調査地点の東側には中・近世の屋敷跡である「大下屋敷（柴崎東屋敷）」が隣接する。調査区は道路建設予定地の１・２区、擁壁設置予定地内の３～６区に大きく分かれる。なお、３～５区はSD-04の範囲確認、６区はSD-20の範囲確認を目的として設定した。現地表は耕作や造成により平坦な地形へと改変されているが、表土下における調査区内の微地形は１区から２区東側および、２区西端が微高地となり、２区中央から西側では浅い谷状の旧地形が観察された。また、１区・２区東端は現代の撹乱が著しい。

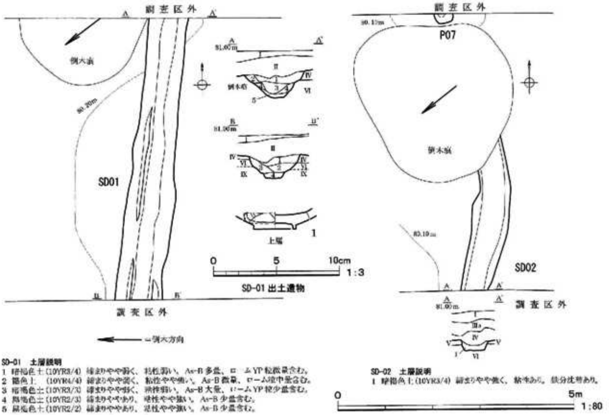
検出された遺構は溝22条、土坑10基、ピット17基である。遺構の密度は低いものの、Ａｓ－Ｂ降下以前の溝を主体として中世以降の堀SD-04や古代以前の河川跡SD-06などの溝が西側を中心に多数確認された。一方で微高地となる１区～２区東側にかけては溝が少なく、ピットや土坑が比較的多く検出されている。

## 2　溝

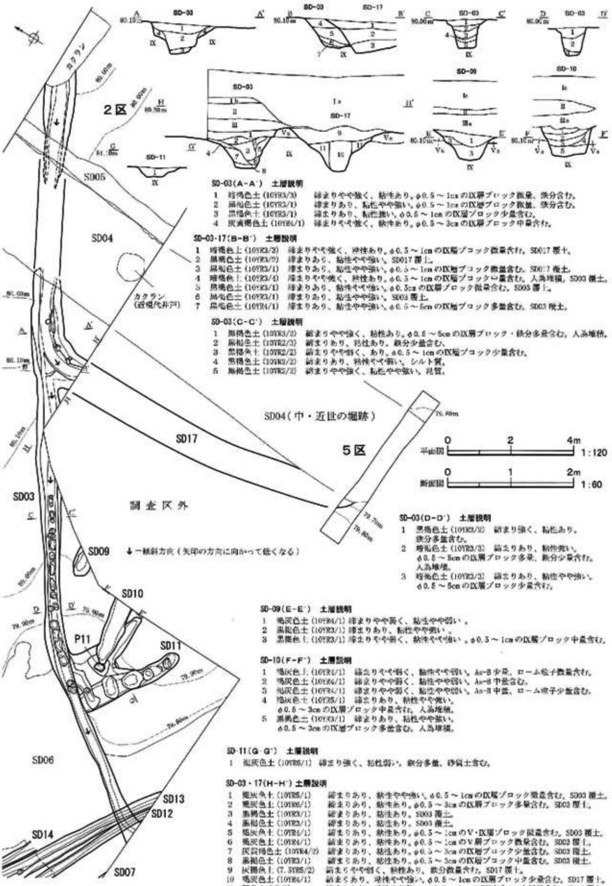
**SD-01**　（第６図/PL.３・７）

**走行方向**：南北（Ｎ－６°－Ｅ）。**規模**：幅0.78～1.02ｍ、深さ31cm。

**遺構**：南北に直線的に走行する溝である。北側および南側は調査区外へ延びる。断面形状は逆台形を呈し、底面は平坦で検出した範囲では特定方向への傾斜は認められない。また、Ⅳ層上面からの掘り込みが認められる。覆土はローム層（Ⅵ層）・黄灰色土（Ⅸ層）ブロックを少量～中量、Ａｓ－Ｂを多量に含むことから人為堆積と考えられる。




第６図　SD-01・02、SD-01出土遺物




第7図 SD-03・09・10・11・17

**遺物**：主に覆土中から陶器埦１点、磁器徳利２点、不明磁器１点が出土し、このうち陶器埦１点を図示した（1）。１は削り出し高台を有し、黄灰色の釉薬が施釉されている。

**所見**：出土遺物から廃絶時期は近世末～近代に求められ、流水の痕跡が認められないことから区画溝の可能性が考えられる。

第１表　SD-01 出土遺物観察表

| No. | 器種 | 法量（cm） | | ①焼成②色調③胎土④残存 | 成・整形技法の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器<br>埦 | 口径<br>底径<br>器高 | －<br>3.5<br>[1.4] | ①普通　②黄灰色（2.5Y8/3）<br>③石英・黒色粒子　④底部片 | 外面：ロクロ成形。底部ケズリ出し高台。<br>内面：ロクロ成形。 | 黄灰色釉薬漬け掛け（貫入あり）。縁辺部を剥離し、再加工。 |
| 2 | 磁器<br>徳利 | 口径<br>底径<br>器高 | －<br><br>－ | ①良好　②明青灰色（5B7/1）<br>③褐色粒子　④頸～肩部片 | 外面：白色釉、染付。肩摘。<br>内面：ロクロ成形。 | 肥前。白色釉（貫入あり）。写真のみ掲載。 |

## SD-02　（第６図 /PL. 3）

**走行方向**：南北（N－15°－E）。　**規模**：幅 58 ～ 77cm、深さ 13cm。

**遺構**：直線的に走向するが、倒木痕との重複地点で西側へゆるやかにカーブする。北側は倒木痕と重複し、本遺構が古い。また、それ以北には延長部が確認できない。南側は調査区外へ延びる。Ⅳ層直下のⅥ層上面で検出された。覆土は部分的にロームブロックや鉄分を帯びた赤褐色土のブロックを多量に含んでおり、人為堆積と考えられる。

**遺物**：本遺構からは出土していないが、重複する倒木痕から古墳時代中～後期の土師器甕片が出土している。

**所見**：検出された層位からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、倒木痕との重複関係から古墳時代中・後期以前に帰属すると考えられる。

## SD-03　（第７図 /PL. 3・4）

**走行方向**：南北（N－61.5°－E）。　**規模**：幅 0.45 ～ 1.00 m、深さ 45cm。

**遺構**：南西－北東方向へ直線的に走向するが、南側は東に向かって緩やかにカーブする。また、分岐点で南北方向の溝 SD-17 へ走向方向を変える。断面形は薬研状に近く SD-07・17 と類似する。SD-04・05・06・11 と重複し、SD-06・11 → SD-03 → SD-04 → SD-05 の新旧関係が確認できた。また、SD-07・12・13 と交差すると思われるが新旧関係をとらえることはできなかった。底面は概ね北東から南西方向へ向かって標高を減じており、北東から南西に向かって水流があったものと思われる。覆土は分岐点より南側では上層～中層にかけて人為堆積が顕著に認められ、分岐点東側と SD-17 ではあまり見られなかったことから、分岐点南側を SD-17 の掘削排土で埋め戻し、SD-17 へ走向方向を変えていると考えられる。また、Ｈラインの土層断面では薬研状に掘りなおした痕跡が確認された。Ａライン北側にも同様の痕跡とみられる段差が確認されている。さらにＣライン下層では水性堆積が確認された。

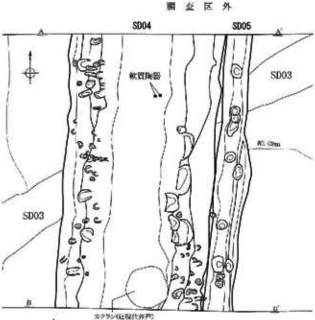
**遺物**：分岐点付近の SD17 部分上層から安山岩を主体とする大型礫が６点出土している。

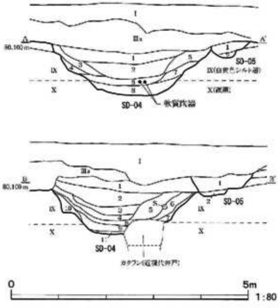
**所見**：検出された層位および覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、SD-07 との覆土や形態の類似性から廃絶時期は古墳時代終末～奈良・平安時代と推測する。下層に水性堆積が認められることから水路状の遺構と考えられる。少なくとも１回の掘りなおしが認められ、廃絶後埋没が下層～中層まで進行した段階で分岐点南側を埋め戻し、SD17 の方向に進路が変更されている。

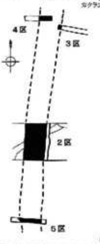
## SD-04　（第８図 /PL. 4・7）

**走行方向**：南北（N－5°－E）　**規模**：幅 3.12 ～ 3.23 m、深さ 92cm。

**遺構**：直線的に走向する。南側は東に向かって緩やかにカーブし、５区では東へ折れ曲がる兆候がみられる。




SD04 検出範囲 (1/600)　0　10　20m　1:600

SD-04(A-A')　土層説明

1　暗褐色土 (10YR3/3)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
2　黒褐色土 (10YR2/3)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
3　黒褐色土 (10YR2/3)　締まりあり、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
4　黒褐色土 (10YR3/2)　締まりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
5　黒褐色土 (10YR2/2)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量、φ1～3cm礫少量含む。盛土・壁崩落土。
6　暗褐色土 (10YR3/3)　締まりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のAs-B多量、鉄分ブロック少量含む。
7　黒褐色土 (10YR3/2)　締まりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のAs-B中量、φ0.5～2cmIX層ブロック中量含む。盛土・壁崩落土。
8　黒褐色土 (10YR3/1)　締まりやや強く、粘性強い。φ1mm以下のAs-B微量、IX層ブロック少量含む。人為堆積。

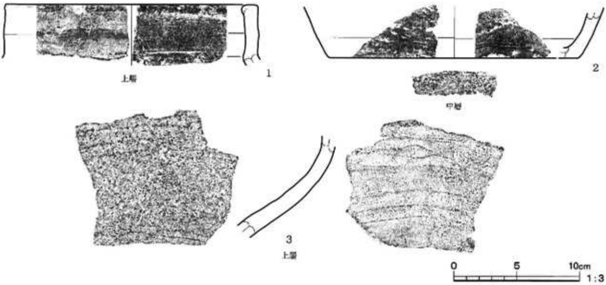
SD-04(B-B')　土層説明

1　暗褐色土 (10YR3/3)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
2　黒褐色土 (10YR2/3)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
3　黒褐色土 (10YR2/3)　締まりあり、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
4　黒褐色土 (10YR3/2)　締まりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のAs-B多量含む。
5　黒褐色土 (10YR2/3)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量、φ1～10cm礫少量含む。盛土・壁崩落土。
6　黒褐色土 (10YR2/2)　締まりやや強く、粘性やや弱い。φ1mm以下のAs-B多量、φ1～3cm礫少量含む。盛土・壁崩落土。
7　黒褐色土 (10YR3/2)　締まりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のAs-B中量、φ0.5～2cmVI層ブロック中量含む。盛土・壁崩落土。
8　暗褐色土 (10YR3/3)　締まりやや強く、粘性やや強い。φ1mm以下のAs-B多量、鉄分ブロック少量含む。
9　黒褐色土 (10YR3/1)　締まりやや強く、粘性強い。φ1mm以下のAs-B微量、IX層ブロック少量含む。人為堆積。
10　黒褐色土 (10YR3/2)　締まりあり、粘性あり。φ1mm以下のAs-B多量含む。壁崩落土。
11　黒色土 (10YR2/1)　締まりあり、粘性強い。φ1mm以下のAs-B微量、IX層ブロック少量含む。人為堆積。

SD-05　土層説明

1　褐灰色土 (10YR4/1)　締まりやや強く、粘性やや弱い。As-AB多量含む。
2　黒褐色土 (10YR3/1)　締まりあり、粘性あり。As-AB中量、VI層ブロック多量含む。

SD-04・05




第8図　SD-04・05、SD-04出土遺物

SD-03・05 と重複し、SD-03 → SD-04 → SD-05 の新旧関係が把握できた。また、SD05 と並走する。底面は比較的平坦で特定の方向への傾斜は認められない。覆土は上層を中心にＡｓ－Ｂを多量に含み、東側から流入する覆土にはローム粒子やⅨ起源の粒子・ブロックがわずかに含まれる。

**遺物**：覆土上層～下層にかけて軟質陶器７点、陶磁器２点が小片の状態で出土している。このうち軟質陶器３点を図示した。１・２は火鉢、３は壺と推定される。そのほか下層から 10 ～ 30cm 大の角閃石安山岩を主体とする大型礫が６点出土している。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以降の溝と考えられ、出土した菊皿の年代から廃絶時期は 18 世紀代と想定される。開削時期は不明であるが、大下屋敷に関連する堀と考えられ、東側に土塁が存在していた可能性がある。

第２表　SD-04 出土遺物観察表

| No. | 器種 | 法量（cm） | | ①焼成②色調③胎土④残存 | 成・整形技法の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 軟質陶器<br>火鉢 | 口径<br>底径<br>器高 | (19.8)<br>－<br>[4.8] | ①普通　②黒 (N2/0)<br>③石英・多量の白色粒子<br>④口縁部片 | 外面：ロクロ成形。ナデ。<br>内面：ロクロ成形。ナデ。 | 上層出土。 |
| 2 | 軟質陶器<br>火鉢 | 口径<br>底径<br>器高 | －<br>(19.8)<br>[4.0] | ①普通　②黒 (N2/0)<br>③石英・白色粒子　④底部片 | 外面：ロクロ成形。ナデ。<br>内面：ロクロ成形。ナデ。 | 中層出土。<br>外面燻しの痕跡あり。 |
| 3 | 軟質陶器<br>壺か | 口径<br>底径<br>器高 | －<br>－<br>－ | ①普通　②黄灰色 (2.5Y6/1)<br>③石英・多量の白色粒子・角閃石・片岩・黒色粒子　④胴部片 | 外面：ロクロ成形。ナデ。<br>内面：ロクロ成形。ナデ。 | 上層出土。 |
| 4 | 陶器<br>菊皿 | 口径<br>底径<br>器高 | －<br>－<br>－ | ①普通　②灰オリーブ<br>(7.5Y5/3)　③白色粒子<br>④体部片 | 外面：ロクロ成形。体部下端回転ヘラケズリ。<br>内面：ロクロ成形。ナデ。 | 中層出土。内外面灰オリーブ色釉（貫入あり）。写真のみ掲載。 |
| 5 | 磁器<br>碗か | 口径<br>底径<br>器高 | －<br>－<br>－ | ①普通　②灰白色 (10Y8/1)<br>③白色粒子<br>④体部片 | 外面：ロクロ成形。ナデ。<br>内面：ロクロ成形。ナデ。 | 中層出土。内外面透明釉薬（貫入あり）。写真のみ掲載。 |

## SD-05　（第８図 /PL. 4・7）

**走行方向**：南北（N－5°－E）。　**規模**：幅 0.54 ～ 0.75 m、深さ 35cm。

**遺構**：南西－北東方向へ直線的に走向し、SD04 の東側に並走する。また、土層断面では SD04 を切るように観察されたことから本遺構が SD04 よりも新しい。底面は平坦であるが、中央部には径 20 ～ 32 cm、深さ 10 ～ 23 cm のピットが 0.8 ～ 1.5 m間隔で検出された。覆土はＡｓ－ＡおよびＡｓ－Ｂを多量に含み、Ⅵ層やⅨ層起源の土が多量かつブロック状に含まれることから、人為堆積と考えられる。

第３表　SD-05 出土近現代遺物一覧表

| No. | 種別 | 器種 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 磁器 | 碗 | 緑色の釉薬。 |
| 2 | 磁器 | 碗 | コバルト色の染付。 |
| 3 | 磁器 | 碗 | 印判絵付け。 |
| 4 | 陶器 | 埦 | 透明の釉薬。 |
| 5 | 陶器？ | 埦か | 口縁部。 |
| 6 | 陶器？ | 蓋か | 口縁部。太陰大極図。 |
| 7 | 陶器 | 徳利 | 茶色の釉薬。 |
| 8 | 軟質陶器 | 火鉢 | 把手。 |
| 9 | 石製品 | 砥石 | 流紋岩製。 |
| 10 | ガラス製品 | 蓋 | 気泡多。合わせ目にゆがみ。型押文字「KM」か。インクの蓋か。 |

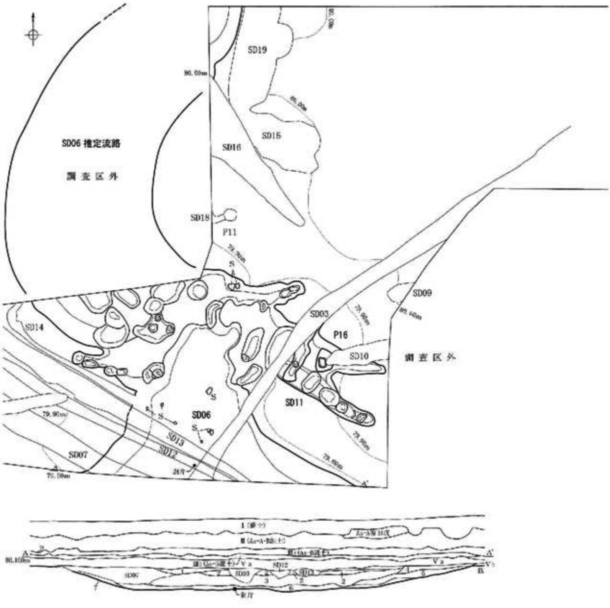
**遺物**：図示し得た遺物はないが、覆土上層～中層から陶磁器片、木片、ガラス片などが多数出土している。上層からは印版絵付けの磁器高台付埦、下層からは軟質土器の火鉢や陶磁器、ガラス瓶蓋、ガラス碗、流紋岩製の砥石が出土している。ガラス製品はいずれも気泡が多量に認められ、合わせ目やゆがみがある。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ａ降下以降の溝と考えられ、出土遺物から廃絶時期は近代と考えられる。地権者の方からの聞き取り調査では 1948 年（昭和 23）年に SD05 東側に家屋を建設し、平成初期（1990 年代初頭）には家屋を取り壊して造成を行っているとのことである。Ⅰ層はこの造成土に対応すると考えられ、SD-05 は土層断面の観察からそれ以前の廃絶と考えられる。また、SD05 の走行方向と一致し、南側にある現在の垣根と連なっていたとのことである。以上から柵列を伴う区画溝と考えられる。

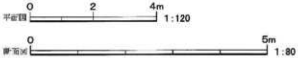
SD-06 (第9図/PL. 4)

**走行方向**：一。　**規模**：幅最大 8.70 m、深さ 20 ～ 45cm。

**遺構**：東西に大きく蛇行し、南端部は東西の幅が急激に広がって調査区外へ延びる。また、幅は不揃いであり、底面は不整なピット状の掘り込みが多数認められるが、人為的なものかどうか判断できない。壁面の立ち上がりは緩やかである。SD07･11 ～ 14 と重複し、本遺構が新しい。覆土上層（1・2層）は鉄分を多く含むV層起源の褐色土が堆積し、本層にはＡｓ－Ｂが含まれない。中層（３～５層）には黒色粘質土、下層（6・7層）には砂利と灰色土の互層が堆積することから、下層は水性体積を示すと考えられ、下層堆積時には水流があったことが窺える。なお、上層は、細い溝状に突出する部分にも堆積し、SD11・15・16・19 の覆上も




SD-06 土層説明
1 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりあり、粘性あり。
2 褐灰色土 (10YR4/1) 締まりあり、粘性やや強い。鉄分多量含む。
3 黒色土 (10YR2/1) 締まりやや強く、粘性強い。
4 黒褐色土 (10YR3/1) 締まりあり、粘性やや強い。鉄分微量含む。
5 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりあり、粘性やや強い。鉄分少量含む。
6 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりやや弱く、粘性あり。礫多量、砂質土含む。
7 暗褐色土 (10YR3/2) 締まりやや弱く、粘性やや弱い。砂質土、鉄分少量含む。




第9図 SD-06

類似する。中層は南側では平面図上で三角形状になる落ち込み部分と北端部で検出した部分でのみ確認された。

**遺物**：鉄分を多く含む覆土上層から角礫・円礫が、下層からは剥片（自然剥離）が出土した。

**所見**：覆土の様相から河川跡と考えられる。南側については遺構プランが東西に大きく広がっており、沼地状の地形を呈していた可能性がある。黒色粘質土主体の中層はおもに有機質の腐食による黒色化と考えられることから、中層堆積時には水流が弱まり、植物の繁茂する湿地のような環境にあったと推察される。また、SD11・15・16・19を含む溝状の掘り込みが多数連結しており、これらが引水を目的とした溝とすれば、自然流路を利用した溜井状の遺構であった可能性がある。本遺構の埋没時期を知ることは難しいが、古墳時代終末～古代の溝SD07・12～14との重複関係から古墳時代には埋没がほぼ完了していたと考えられる。

## SD-07 （第11図/PL.4）

**走行方向**：W－61°－N。　**規模**：幅0.69～0.97m、深さ33cm。

**遺構**：北西－南東方向に直線的に走行し、調査区外へ延びる。SD-12・13・14と並走する。SD-06と重複し、本遺構が新しい。底面は比較的平坦で、南東方向に向かって緩やかに標高を減じている。また、断面形状は薬研状を呈する。覆土は黒褐色土を主体とし、Ａｓ－Ｂを含まない。最上層にはは埋めもどしとみなせる人為堆積が認められる。

**遺物**：図示し得た遺物はないが、覆土中から土師器甕の小片が1点出土している。このほか角礫1点、円礫1点が中層から出土した。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、出土遺物から廃絶時期は古墳時代終末～奈良・平安時代と想定される。また、SD-12・13・14と並走することからこれらの溝と同時期ないし、ほとんど時期差なく機能していた可能性が高い。明確な水性堆積は認められなかったが、底面に傾斜をつけて掘削されていることから水路状の遺構と考えられる。

## SD-08 （第11図/PL.5）

**走行方向**：N－71.5°－E。　**規模**：幅0.37～0.42m、長さ3.75m、深さ5cm。

**遺構**：全形が直線的に検出された。SD12・13と重複し、本遺構が新しい。底面は比較的平坦である。覆土は灰褐色土を主体とし、Ａｓ－Ｂを含む。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以降の溝と考えられ、性格は明らかにし得ない。

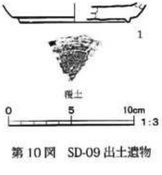
## SD-09 （第9・10図/PL.7）

**走行方向**：N－87°－E　**規模**：幅0.56m、深さ43cm。

**遺構**：直線的に検出され、東側の調査区外へ延びる。底面は凹凸がある。覆土は灰褐色土を主体とし、Ａｓ－Ｂを含み、水性堆積が認められる。

**遺物**：陶磁器、ガラス等が出土し、陶器塊1点を図示した。出土遺物には近世～近代のものが混在する。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以降の溝と考えられ、ガラス瓶の出土から近代以降に廃絶されたと考えられる。流水の痕跡が認められるが、西側は閉じており、区画溝等の可能が考えられる。




第10図　SD-09出土遺物

第4表　SD-09 出土遺物観察表

| No. | 器種 | 法量 (cm) | | ①焼成②色調③胎土④残存 | 成・整形技法の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器<br>埦 | 口径<br>底径<br>器高 | ―<br>(8.6)<br>[1.5] | ①普通②灰白色 (2.5Y7/1)<br>③白色・褐色粒子<br>④底部片 | 外面：ロクロ成形。底部回転ヘラケズリ→高台貼付。<br>内面：ロクロ成形。 | 長石釉施釉（貫入あり）。近世。 |
| 2 | 磁器<br>碗 | 口径<br>底径<br>器高 | ―<br>―<br>― | ①普通②灰白色 (N8/0)<br>③白色粒子<br>④底部片 | 外面：ロクロ成形。屑線。<br>内面：ロクロ成形。ケズリ出し高台。印判絵付けの花文。 | 透明な釉薬。写真のみ掲載。 |

## SD-10　(第9図 /PL. 5)

**走行方向**：N－80°－E。　**規模**：幅1.20 m、深さ46cm。

**遺構**：直線的に検出され、東側の調査区外へ延びる。底面は比較的平坦である。黒褐色土を基調とし、As－Bを含む。また、最下層はⅨ層起源のブロックを多量に含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からAs－B降下以降の溝と考えられる。流水の痕跡が認められるが、西側は閉じており、区画溝等の可能性が考えられる。

## SD-11　(第9図 /PL. 5)

**走行方向**：N－57°－E。　**規模**：幅1.10 m、深さ17cm。

**遺構**：直線的に検出され、東側の調査区外へ延びる。底面は凹凸がある。覆土にはⅤ層起源の鉄分ブロックが多量に含まれ、非常に固く締まる。SD-06 上層・15・16・19 等と覆土が類似する。SD-06 と重複するが、新旧関係は把握できなかった。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からAs－B降下以前の溝と考えられる。覆土の類似からSD-06 と同時期に機能し、SD-06 への引水を目的としていた可能性がある。

## SD-12　(第11図 /PL. 4)

**走行方向**：W－61°－N。　**規模**：幅0.28～0.45 m、深さ20cm。

**遺構**：直線的に検出され、調査区外へ延びる。また、SD-07・13・14 と並走する。北西隅部では南西にカーブして東西方向へ走る。この部分は一段低く掘り込まれており、別の遺構である可能性も考えられるが、新旧関係は把握できなかった。断面形は逆台形状を呈する。底面はおおむね平坦であるが、図示しえない掘削の単位がわずかに確認できる。また、南東方向に向かって緩やかに標高を減じている。SD-06 と重複し、本遺構が新しい。覆土は黒褐色土を基調とし、As－Bを含まない。また、下層にⅨ層起源のブロックを多量に含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物**：覆土中から土師器甕の小片が出土している。

**所見**：覆土の様相からAs－B降下以前の溝と考えられる。また、SD-07・13・14 と並走することからこれらの溝とほぼ同時期に機能していた可能性が高い。SD-03 と同様に埋め戻しが認められる。明確な水性堆積は認められなかったが、底面に傾斜をつけて掘削されていることから水路状の遺構と考えられる。

## SD-13　(第11図 /PL. 4)

走行方向：W－60.5°－N。　規模：幅0.54～0.63 m、深さ12cm。

**遺構**：直線的に検出され、東側の調査区外へ延びる。また、SD07・12・14 と並走する。SD06 と重複し、本遺構が新しい。また、SD07・12・14 と並走する。断面形は逆台形状を呈する。底面はおおむね平坦であるが、

西側の１段高い部分には径 13 ～ 45 ㎝ほどの掘削痕が連続的に確認された。また、南東方向に向かって緩やかに標高を減じている。覆土にはＡｓ－Ｂを含まず、Ⅸ層起源のブロックを多量に含むことから人為堆積と考えられる。

**遺物**：検出面から土師器甕の小片が１点出土しているが、図示し得ない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、廃絶時期は出土遺物から古墳時代終末～奈良・平安時代に求められる。また、SD-07・13・14 と並走することからこれらの溝とほぼ同時期に機能していた可能性が高い。明確な水性堆積は認められなかったが、底面に傾斜をつけて掘削されていることから水路状の遺構と考えられる。

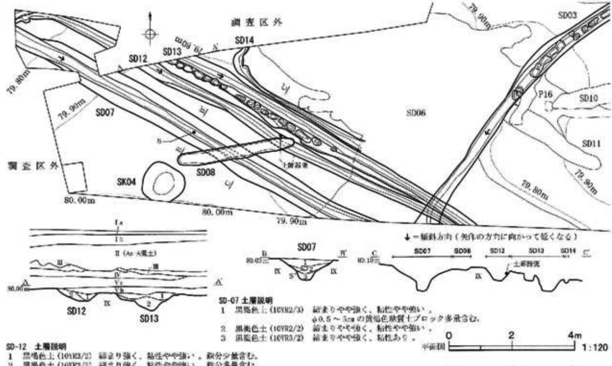
## SD-14 （第 11 図 /Pl. 4）

**走行方向**：W－ 28° －N。 **規模**：幅 0.12 ～ 0.32 m、深さ 26cm。

**遺構**：やや蛇行気味であるが、おおむね直線的に検出され、北西側はＬ字状に曲がって調査区外へ延びる。SD06 との重複部分では検出することができなかった。底面は細かな起伏があり、特定の方向への傾斜は認められない。また、SD-07・12・13 と並走する。これらの溝に比して立ち上がりは明瞭でなく、幅も一回り小さく一定でない。SD-06 と重複し、本遺構が古い。覆土は黒褐色土を基調とし、Ａｓ－Ｂを含まない。また、最下層にはⅨ層起源のブロックを多量に含まれることから人為堆積と考えられる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、廃絶時期は併走する SD-13 出土遺物から古墳時代終末～奈良・平安時代に求められる。また、SD-07・12・13 と並走することからこれらの溝とほぼ同時期に機能していた可能性がある。また、明確な水性堆積や底面の傾斜は認められなかったが、SD-07・12・13 と




第 11 図 SD-07・08・12 ～ 14

比較して規格が著しく異なることから水路への引水を目的としたものと推測する。

### SD-15 (第12図/PL. 5)

**走行方向**：W－57°－N。 **規模**：幅1.03～1.16 m、深さ16cm。

**遺構**：直線的に検出され、北西側は調査区外へ延び、東側は閉じる。SD-16と重複し、本遺構が古い。底面はピット状の掘り込みが不規則に認められる。覆土はV層起源の鉄分を多く含み、非常に堅く締まる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、SD-06への引水を目的とした溝の可能性がある。

### SD-16 (第12図/PL. 5)

**走行方向**：W－30°－N。 **規模**：幅0.32～1.37 m、深さ20cm。

遺構：直線的に検出され、西側の調査区外へ延びる。SD-15と重複し、本遺構が新しい。底面はピット状の掘り込みが不規則な配置で認められる。覆土はV層起源の鉄分を多く含み、非常に堅く締まる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、SD-06への引水を目的とした溝の可能性がある。

### SD-17 (第7図/PL. 3・4)

**走行方向**：W－9°－N。 **規模**：幅1.12 m、深さ70cm。

**遺構**：SD-03から連なり、調査区南東側へ延びる。５区でもプランのみ確認された。断面形は薬研状を呈し、SD-07に近い。底面は平坦でSD03の北側からSD17にかけて緩やかに標高を減じている。覆土は１層に鉄分を含み、２・３層は黒色土やIX層起源のブロックを含む人為堆積である。１回の掘りなおしが認められる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：SD-03の進路変更に伴い掘削された溝である。覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、廃絶時期はSD-07との覆土や形態の類似性から古墳時代終末～奈良平安時代と推測する。底面の傾斜からSD-03と同様に水路状の遺構と考えられる。

### SD-18 (第12図)

**走行方向**：N－85°－E。 **規模**：幅0.23 m、深さ10cm。

**遺構**：西側へ延びる。P-11と重複し、本遺構が古い。覆土上層にIX層起源のブロックを多く含み、人為堆積と考えられる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、性格は不明である。

### SD-19 (第12図/PL. 5)

**走行方向**：N－9°－E **規模**：幅1.17～1.34 m、深さ50～62cm。

**遺構**：直線的に検出され、北側は調査区外へ延びる。覆土は上層にV層起源の鉄分を多量に含み非常に固く締まる。下層は黒褐色土を基調とする。底面には軸に直行する幅狭い溝（掘削痕）が３条確認された。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、性格は不明である。

### SD-20　（第12図）

**走行方向**：N－65°－E。　**規模**：幅（1.55）m、深さ78cm。

**遺構**：３区で確認され、南西・北東の調査区外へ延びる。底面は平坦で検出した範囲では特定方向への傾斜は認められない。覆土は黒褐色を主体とし、Ａｓ－Ｂを含まない。Ⅳ層上面からの掘り込みが認められる。

**遺物**：下層から人頭大の円礫が１点出土している。

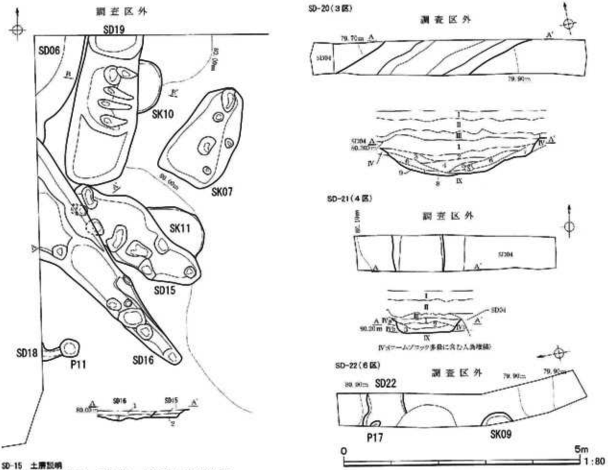
**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、検出された層位からSD-03・07・12・13・14・17よりも新しい。また、検出範囲を確認するため６区のトレンチを設定したが、検出されたSD-22は深さが極端に異なるため、同一の溝ではないと判断した。SD-03との走向の一致から水路状の遺構と推測する。

### SD-21　（第12図）

**走行方向**：N－０°－E。　**規模**：幅1.02～1.06ｍ、深さ38cm。

**遺構**：４区で確認され、調査区外へ延びる。底面は平坦である。覆土は灰黄褐色を基調とし、鉄分を含む。

**遺物**：出土していない。




SD-15　土層説明
1　褐灰色土（10YR5/1）　締まり強く、粘性弱い。鉄分多量含む。
2　褐灰色土（10YR4/1）　締まり強く、粘性弱い。鉄分中量含む。

SD-16　土層説明
1　褐灰色土（10YR5/1）　締まり強く、粘性弱い。鉄分多量含む。
2　黄灰色土（2.5Y5/1）　締まり強く、粘性弱い。鉄分中量含む。
φ0.5～3cmのⅨ層ブロック多量含む。

SD-21　土層説明
1　褐色土（10YR4/4）　締まりやや強く、粘性弱い。鉄分多量含む。
2　灰黄褐色土（10YR5/2）　締まりやや強く、粘性弱い。鉄分少量、砂質土含む。
3　灰黄褐色土（10YR4/2）　締まりやや強く、粘性弱い。鉄分微量、砂質土含む。

SD-20　土層説明
1　黒褐色土（10YR2/3）　締まりあり、粘性あり。小礫φ3cm少量含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）　締まりやや弱く、粘性あり。鉄分中量含む。
3　黒褐色土（10YR2/3）　締まりあり、粘性あり。Ⅸ層粒微量含む。
4　黒褐色土（10YR2/3）　締まりやや弱く、粘性あり。
5　黒褐色土（10YR3/2）　締まりやや弱く、粘性弱い。Ⅸ層粒微量、砂質土含む。
6　黒褐色土（10YR3/2）　締まりあり、粘性やや弱い。
7　黒褐色土（10YR2/2）　締まりやや弱く、粘性やや弱い。砂質土含む。
8　黒褐色土（10YR2/3）　締まりやや弱く、粘性やや弱い。砂質土、Ⅸ層粒微量含む。
9　黒褐色土（10YR2/3）　締まりやや弱く、粘性あり。鉄分少量、Ⅸ層粒微量含む。

第12図　SD-15・16・18～22

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、性格は明らかにし得ない。

SD-22　（第 12 図）

**走行方向**：N－90°－E。　**規模**：幅 0.77 ～ 0.94 m、深さ 2 cm。

**遺構**：6 区で確認され、南西・北東の調査区外へ延びる。底面は平坦である。P-17 と重複し、本遺構が古い。覆土は黒褐色を主体とし、Ａｓ－Ｂを含まない。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の溝と考えられ、性格は明らかにし得ない。

## 3　土坑

土坑は計 10 基が確認された。このうち明確な掘り込みを有する 4 基を図示した。

SK-01　（第 13 図 /PL. 5・7）

**規模**：径 133cm 以上、深さ 30cm。

**遺構**：平面・断面形状は不明である。覆土は黒褐色土を基調とし、Ａｓ－ＹＰやロームブロックを含む。

**遺物**：覆土中から土師器甕 1 点、高坏 1 点が出土したが、小片のため図示し得ない。

**所見**：出土遺物から古墳時代前期の土坑と考えられる。

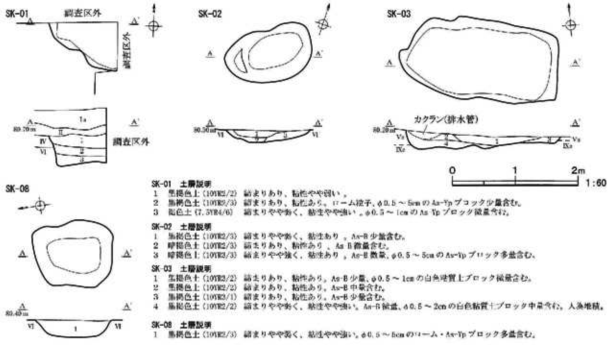
第 5 表　SK-01 出土遺物観察表

| No. | 器種 | 法量（cm） | | ①焼成②色調③胎土④残存 | 成・整形技法の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 土師器<br>甕 | 口径<br>底径<br>器高 | －<br>－<br>－ | ①普通②灰白色（2.5Y7/1）<br>③白色・褐色粒子<br>④胴部片 | 外面：ハケメ調整<br>内面：ナデ。 | 内面にコゲ付着。写真のみ掲載。 |

SK-02　（第 13 図 /PL. 5）

**規模**：長軸 1.4 m、短軸 0.85 m、深さ 18cm

**遺構**：平面形は楕円形を呈し、断面形は弧状を呈する。底面は平坦であるが、西側に段差を有する。覆土は




第 13 図　SK-01 ～ 03・08

黒褐色土を基調とし、Ａｓ－Ｂを含む。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以降の土坑と考えられ、性格は明らかにし得ない。

### SK-03　（第13図/PL. 6）

**規模**：長軸2.51ｍ、短軸1.23ｍ、深さ31cm

**遺構**：平面形は長方形を呈する。覆土下層にはSK-01の覆土と類似し、Ⅸ層由来のブロックが多量に含まれることから、人為堆積と考えられる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の土坑と考えられ、性格は明らかにし得ない。

### SK-08　（第13図/PL. 6）

**規模**：深さ31cm

**遺構**：平面形は長方形を呈する。覆土下層にはⅨ層由来のブロックが含まれ、人為堆積と考えられる。

**遺物**：出土していない。

**所見**：覆土の様相からＡｓ－Ｂ降下以前の土坑と考えられ、性格は明らかにし得ない。

第6表　土坑一覧表

| 遺構名 | 位置 | 長軸 | 短軸 | 深さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| SK-01 | 1区 | - | - | 30 | S字甕胴部片（内面コゲあり）1点、高坏体部片1点出土。古墳前期。 |
| SK-02 | 2区東 | 140 | 85 | 19 | |
| SK-03 | 2区東 | 251 | 123 | 27 | 長方形に近い平面形。覆土にＡｓ－Ｂ含む。 |
| SK-04 | 2区西 | 130 | [116] | 17 | 自然の窪みか。 |
| SK-05 | 2区西 | - | - | - | 試掘トレンチ。欠番。 |
| SK-06 | 2区西 | 93 | 62 | 20 | 底面にピット状の掘り込み多数。 |
| SK-07 | 2区西 | 221 | 118 | 17 | 長方形に近い平面形。 |
| SK-08 | 2区東 | 123 | 102 | 24 | 隅丸長方形。SK01と同様の覆土。人為堆積。古墳前期か。 |
| SK-09 | 6区 | - | - | 5 | 自然の窪みか。 |
| SK-10 | 2区西 | - | - | 15 | SD19と重複（SK10→SD19）。覆土に鉄分を多く含む。自然の窪みか。 |
| SK-11 | 2区西 | - | - | 12 | SD15と重複（SK10→SD15）。覆土に鉄分を多く含む。自然の窪みか。西側は掘りすぎ。 |

## 4　ピット

ピットは計19基が確認された。明確な掘立柱建物跡や柵列を構成するものは確認できなかったが、P-02は柱のアタリが確認され、覆土にはＡｓ－Ｂを含むことから大下屋敷跡内の建物を構成する柱穴の可能性がある。P-11は礎石を伴い、礎石の上は近代以降の瓦片で覆われていた。瓦はいずれも燻し瓦で平瓦・桟瓦があり、すべて欠損品である。礎石の中央部は赤く変色しており、柱のアタリ痕と考えられる。

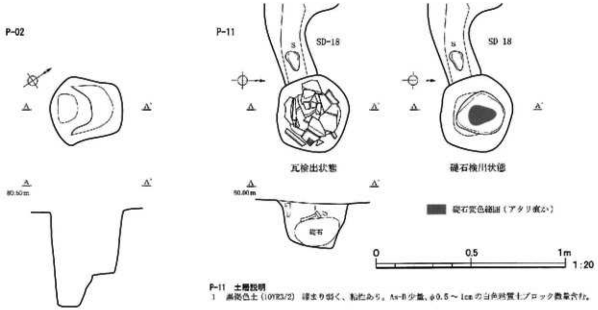
第7表　P-11出土近現代遺物一覧表

| No. | 種別 | 器種 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 燻し瓦 | 平瓦 | 両面ナデ調整。 |
| 2 | 燻し瓦 | 桟瓦 | カキメ、印刻「18□」。 |

第8表　ピット一覧表

| 遺構名 | 位置 | 長軸 | 短軸 | 深さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| P-01 | 1区 | - | - | 18 | |
| P-02 | 1区 | 38 | 32 | 51 | Ａｓ－Ｂ多量含む人為堆積。アタリ。柱穴か。 |
| P-03 | 1区 | (35) | 26 | 30 | |
| P-04 | 1区 | 41 | 31 | 29 | SK01の覆土と近似。人為堆積。古墳時代か。 |
| P-05 | 2区東 | 54 | 40 | 11 | Ａｓ－Ｂ含む。柱穴か。 |
| P-06 | 2区東 | - | - | 25 | Ａｓ－Ｂ含む。 |
| P-07 | 2区東 | - | - | 36 | |
| P-08 | 2区東 | 27 | 27 | 12 | |
| P-09 | 2区東 | 39 | 33 | 10 | |

| 遺構名 | 位置 | 長軸 | 短軸 | 深さ | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| P-10 | 2区東 | 55 | 50 | 6 | |
| P-11 | 2区西 | 40 | 30 | 26 | 瓦・礎石出土。近現代。 |
| P-12 | 2区西 | 18 | 16 | 16 | |
| P-13 | 2区西 | 40 | 16 | 20 | |
| P-14 | 2区西 | 30 | 24 | 25 | |
| P-15 | 2区西 | 27 | 14 | 20 | |
| P-16 | 2区西 | 30 | 20 | 48 | |
| P-17 | 6区 | | - | 11 | Ａｓ－Ｂ含む。 |




P-11 土層説明
1 黒褐色土（10YR3/2）締まり弱く、粘性あり。As-B少量、φ0.5～1cmの白色粘質土ブロック[illegible]含む。

第14図 P-02・11

## 5 遺構外出土遺物

主に表土掘削中の出土遺物や撹乱から出土した遺物、表採遺物について記述する。図示し得たものはないが、古墳時代中期・後期のものとみられる土師器甕の小片が、鉄分を多く含むⅤ層中より出土している。Ⅴ層はSD06の上層を主に構成する土であり、これを掘り込んで古代の溝SD03・07・12・13等が開削されていることから、本層の堆積時期がおおむねこの時期と推定される。このほか、SD02と重複する倒木痕や6区でも表土掘削中に古墳時代～古代の遺物がみられた。このように、本遺跡地にわずかではあるが当該期の痕跡が点々と認められることは注意され、多数検出されたAs－B降下以前の溝が同時代に開削された可能性を補強する。

第9表 出土遺物集計表（重量：g）

| 遺構名 | 古墳前期 | | 古墳中後期 | 古代 | 近世（軟質陶器は近代含む） | | | | | | | | 近現代 | | | | | | | | | | | | | | 時期不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 土師器 | | | | 軟質陶器 | | | 陶器 | 白磁 | 磁器 | | | 陶器 | | | | 磁器 | | ガラス製品 | | | 瓦 | | 石製品 | | その他 | |
| | 甕 | 高坏 | 甕 | 甕 | 壺 | 火鉢 | 焙烙 | 碗 | 碗 | 皿 | 徳利 | 不明 | 碗 | 皿 | 擂鉢 | 不明 | 碗 | 不明 | 瓶 | 蓋 | 不明 | 桟瓦 | 平瓦 | 砥石（流紋岩） | 砥石 | 土製人形 | 瓦片 |
| SD-01 | | | | | | | | 33.1 | | | 20.0 | 2.0 | | | | | | | | | | | | | | | |
| SD-04 | | | | 15.0 | 659.3 | 115.0 | 15.7 | | 46.5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| SD-05 | | | | | | 146.0 | | | | | | | 15.0 | 6.0 | 21.4 | 17.3 | 42.0 | | 16.1 | 34.1 | 1.4 | | | 127.1 | 8.0 | | |
| SD-06 | | | | 15.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 34.0 |
| SD-12 | | | | 5.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| SD-13 | | | | 2.3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK-01 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| SK-05（火） | 10.5 | 2.7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 56.6 | | | | |
| P-11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2153 | 378.2 | | | | |
| 2区東倒木痕 | | | 48.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Ⅴ層 | | | | 1.8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| SD-02・03 | | | 23.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6区一括 | | | 19.0 | 1.0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 表採 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 19.0 | |
| 合計 | 10.5 | 2.7 | 90 | 41 | 659.3 | 261 | 15.7 | 33.1 | | 0 | 20 | 2 | 15 | 6.0 | 21.4 | 17.3 | 42 | 0 | 16.1 | 34.1 | 1.4 | 2154.7 | 433.78 | 127.1 | 8 | 19 | 34.0 |

# Ⅵ まとめ

## 1 Ａｓ－Ｂ降下以前の溝について

本遺跡では試掘調査の結果から、当初は古墳時代の集落や古墳が検出されると予想されていた。しかし、発掘調査の結果、検出された遺構は溝を中心とするものであり、集落域や墓域ではないことが明らかになった。多数検出された溝の中で最も多いのはSD-03・07・12・13・14など、Ａｓ－Ｂ降下以前の水路である。これらの水路群は出土遺物から古墳時代終末～奈良・平安時代に帰属すると推定され、SD-07・12・13・14は並走し、SD-03は付け替えが確認できるなど掘りなおしや改修が行われていたことが窺える。また、SD-03・07・12・13については底面の傾斜や土層断面の観察から南側のSD-06付近へ向かって水流があったことが確認できた。この点からSD-03のように異なる方向からの水路も取り込んで同一の地点へ水を集めようとした意図が読み取れる。SD-06はこれらの溝の開削時には大部分が埋没し、この付近は浅い谷状の地形になっていたと考えられる。この谷は現況地形の観察から調査地点の南側に位置し、東西方向へ走る谷へと続いていくと想定され、SD-03・07・12・13はこの谷地形を利用した水路と考えられる。現在の用水路の導水方向（第16図）などを参考にすると、本遺跡で検出された水路群は台地上およびその北側の低地帯からの水を集め、崖線に沿って南東方向へ続いていたものと想定される。

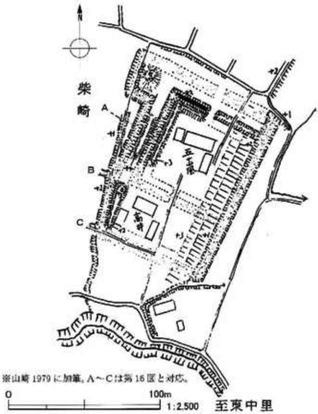
本遺跡の西側に広がる低地帯では北西側の柴崎前遺跡から南東側の矢中遺跡群にかけて条里地割に基づいたＡｓ－Ｂ下の水田とともに上幅４～５ｍを測る大型の水路状遺構が検出されている。この水路は、条里の北西－南東方向の対角線上に開削されており、矢中遺跡群では坪交点部に水溜め状遺構が敷設されている。また、大型水路は水溜め状遺構の南東方向へ延び、さらに下流へと水を流していたことが明らかにされている。本遺跡のSD-07・12・13などは矢中遺跡群の大型水路と並走し、ある地点では合流するような進路をとる。以上から、本遺跡の水路群は主に本遺跡の南東側に広がる低地帯を主な受益地とする水路群と考えられる。柴崎前遺跡や矢中遺跡群にみられるように古代における本地域の水田開発は条里制にもとづいた計画的で大規模なものであり、「官主導」と考えられる性格を有する。本遺跡の水路群も改修や掘り直しが多く認められる点や上記の大型水路との関連が窺われるような進路から、そのような性格を帯びるものと考えられよう。

## 2 大下屋敷（柴崎東屋敷）について

今回の調査で検出された溝SD-04は調査の結果、①南北約33ｍ以上の範囲で確認され、南側の５区では東へ曲がる兆候がみられたこと、堀の上幅は最大3.2ｍ、検出面からの深さは0.9ｍ、現地表面からの深さ約1.9ｍを測ること、②底面の形状は平底で断面逆台形状を呈すること、③土層断面の観察から東側に土塁が存在した可能性があること、④出土遺物から18世紀代には埋没していた可能性が高いことが明らかになった。これらの成果や現況で確認できる南北の地割りの線に連なる点などを考慮すると、調査区の東側に隣接し、中世末に田口氏(1)の屋敷であった大下屋敷に伴う堀の一部である可能性が高い。また、調査中は雨が少ない時期であったにも関わらず、堀内部は湧水が著しく、常に帯水した状態であった。SD-04部分に近代以降の井戸が掘られていた点も考慮すると、堀の機能時にも恒常的に堀内が帯水した状態であったと推測する。したがって空堀を示す「壕」よりも自然の湧水を利用した「濠」と呼ぶべき性格ものであろう。

大下屋敷は東側に低地を望む台地の縁に占地し、山崎一氏の踏査で北面と西面には堀跡が確認されている。西面の堀の両側には高さ約３ｍを測り、外側が高い２重の土塁が現存し、その北端は櫓台となる。また、東側崖下は現在水田となっているが、この部分も壕の名残りと想定されている（第15図）。さらに、山崎氏

は「道路や低所の配置から更に外側を囲んで東西220 m、南北 180 m の外郭が構えられていた」と推測されている（山崎 1979）。SD-04 が外郭の堀であったとすれば規模は東西 145 m、南北 160 m 程度で大下屋敷は山崎氏の想定よりも規模の小さい屋敷であったことになり、3 重の堀が巡る。また、想定通りならば西側については 4 重の堀が巡ることになる。SD-04 を外郭の堀と仮定し、今回の調査成果と現況での地形観察[2]をもとに屋敷の範囲を復元すると第 16 図のようになる。なお、近世末の廃絶と考えられる SD-01 も SD-04 の東側約 19 m の地点でほぼ軸を同じくして南北に走っている。SD-04 と同様に開削時期は不明であるが、同時期に機能していたとすれば、幅・深さともに小規模であることから、屋敷内を区画する溝であった可能性が考えられる。この区画溝から内側では建物を検出できなかったものの、検出されたピット P-02 は As－B 混入土によって埋没し、



第 15 図　大下屋敷縄張図

第 16 図　大下屋敷推定範囲

柱のアタリ痕が確認されたことから、SD-01の内側では建物が存在した可能性が高い。また、SD-01は出土遺物から廃絶時期が近世末〜近代と推定され、SD-04よりも後に廃絶していると考えられる。このため、SD-04が埋没し、その機能が失われた後はSD-01が屋敷の境界線となり、屋敷の範囲が縮小していた可能性も考えられよう。なお、SD-04に隣接して並走する近代の溝SD-05は調査結果から少なくとも昭和末期までは機能していたことが判明している。したがって、SD-05の開削時には埋没したSD-04が視認できるような状態にあったと考えることができる(3)。

発掘調査が行われ、同じ田口氏の屋敷である玉村町の田口下屋敷（中島2000）で検出された外堀は上幅2ｍ以上、現地表面からの深さ2.4ｍを測り、底面は本遺跡SD04と同様に平底状をなす。また、3重の堀を有し、外郭の規模は東西約110ｍ、南北約160ｍである。本遺跡と比較すると堀については外側が直線的に立ち上がるなど細部で違いがみられるものの、屋敷の規模や西側の守りを厳重にするような堀の配置・南北方向に入口を有する構造など、類似点が認められる。田口下屋敷は『田口文書』によると大下屋敷に先行する時期の所産であることから、大下屋敷が構造や規模について影響を受けた可能性はあろう。

以上、大下屋敷の範囲について調査成果をもとに考察を行ったが、屋敷の明確な範囲についてはなお決め手を欠き、今回発見された堀からは中世に帰属する遺物が検出されていないことから近世以降に開削された可能性が残る。提示した屋敷の範囲も今後の調査・研究によって随時変更が行われるべきものである。

**註**

(1) 正徳3（1713）年に成立した『田口文書』によれば、田口氏は16世紀中ごろに現在の玉村町上茂木に茂木館を構え、その後玉村町から高崎市東部を治めていたとされる。永禄6年（1563）年の長尾輝虎（後の謙信）の和田城攻めに際し、田口広真（後の吉真）が和田城に籠城してこれを退け、利根川の渡河点を調査した功績により永禄9（1566）年に武田信玄より柴崎（現在の高崎市柴崎町付近）の知行を与えられている。その後、広真は柴崎に屋敷を構えたと伝えられており、その屋敷が大下屋敷と想定されている（山崎1979）。なお、山崎氏の『群馬県古城塁址の研究』(1971)には「柴崎東屋敷」として掲載されているが『同書補遺編』(1979)では「大下屋敷」と改められているため、本報告ではこの名称を用いることとする。また、『田口文書』についての註釈や田口氏については山崎1978および中島2000に詳しい。

(2) 発掘調査時における現況地形の観察では北側の現地割の境界線上に東西に走る窪み（第16図A）が確認され、東側の延長線上には山崎氏の縄張図に記録されている堀跡（第15図A）につながる。また、同じく東西に走る排水溝（第16図B）が南側にあり、これも堀の名残と想定した。

(3) 地権者の方の聞き取り調査ではSD-05付近は平成の造成前は「池のような状態になっていた」らしく、SD-05には南側に現存する民家の垣根から溝が連なっていたとのことである。

**引用・参考文献**

麻生敏隆ほか　2011『柴崎熊野前遺跡II』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第513集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
高崎市　1996『新編 高崎市史』資料編3　中世1
高崎市　2000『新編 高崎市史』通史編2　原始古代II
高崎市　2003『新編 高崎市史』通史編1　原始古代
石丸敦史ほか　2012『柴崎・隼人遺跡3』高崎市文化財調査報告書第298集　有限会社 毛野考古学研究所ほか
中島直樹　2000『田口下屋敷遺跡』玉村町文化財発掘調査報告書第36集　玉村町教育委員会/玉村町遺跡調査会
廣津英一　1998『柴崎熊野前遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第233集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
山崎一　1971「241 柴崎東屋敷」『群馬県古城塁址の研究』上巻　群馬県文化事業振興会
山崎一　1978『田口文書註解』
山崎一　1979「241 大下屋敷」『群馬県古城塁址の研究　補遺編』上巻
山崎一　1989「群馬県における中世城館の特色」『群馬県の中世城館』　群馬県教育委員会

# 写真図版

調査区遠景（榛名山方面を望む）

大下屋敷跡と調査地点（上が南）

調査区全景（上が南）

1区全景（北から）

2区東側全景（東から）

2区西側全景（東から）

3区全景（南東から）

4区全景（西から）

5区全景（西から）

6区全景（北から）

SD-01 全景（北西から）

SD-02 全景（北から）

SD-03 全景（北東から）

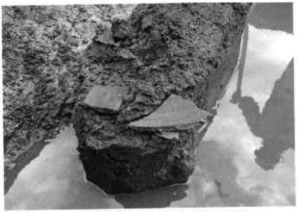
SD-03 西側全景（北東から）

SD-03 Dラインセクション（北東から）

SD-03・17 分岐点全景（北東から）

SD-04 全景（北から）

SD-04 Bラインセクション（北から）



SD-04 下層遺物出土状態（北西から）

SD-04 掘削痕近景（北東から）

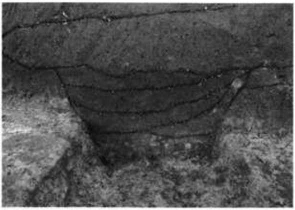
SD-05 全景（北から）

SD-06 全景（南東から）

SD-07・12・13・14 全景（南東から）

SD-08 全景（東から）

SD-10 全景（東から）



SD-10 セクション（西から）

SD-11 全景（東から）

SD-15・16 全景（南東から）

SD-19 全景（北から）

SK-01 全景（北東から）

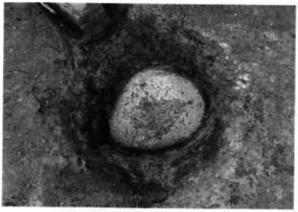
SK-02 全景（北西から）

SK-03 全景（北東から）

SK-08 全景（北から）

P-02 全景（北から）

P-11 遺物出土状態（北東から）



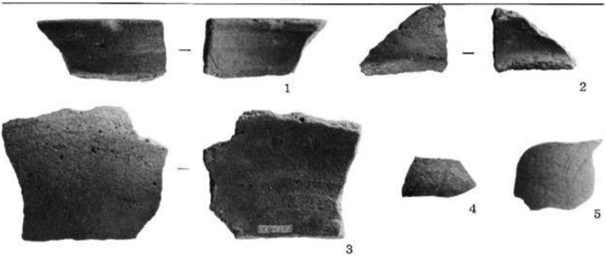
P-11 礎石検出状態（南東から）

基本層序①セクション（東から）

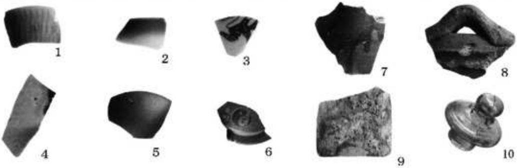
基本層序③セクション（南から）

SD-04 調査風景（北東から）

SD01




SD-04

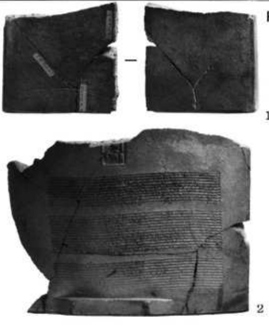



SD-05

SD-09

SK-01

P-11




柴崎屋敷遺跡出土遺物

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| フリガナ | シバサキヤシキイセキ |
| 書名 | 柴崎屋敷遺跡 |
| 副書名 | 宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 高崎市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第334集 |
| 編著者名 | 淺間陽 |
| 編集機関 | 有限会社 毛野考古学研究所<br>〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel 027-265-1804 |
| 発行機関 | 有限会社 毛野考古学研究所 |
| 発行年月日 | 平成26年6月30日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 位置 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡 | 北緯 | 東経 | | | |
| しばさきやしきいせき<br>柴崎屋敷遺跡 | ぐんまけんたかさきし<br>群馬県高崎市<br>しばさきまちやしき<br>柴崎町屋敷<br>564-1、564-5、566-1ほか | 102020 | 578 | 36°18′43″ | 139°3′26″ | 20131105<br>～<br>20131202 | 394.57㎡ | 宅地造成 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 柴崎屋敷遺跡 | 生産<br>城館 | 古墳時代<br>古代<br>中世<br>近世<br>近現代 | 溝 22条<br>土坑 10基<br>ピット 17基 | 土師器、軟質陶器、陶器、磁器、瓦、ガラス製品 | As-B降下以前の水路群を検出。<br>中近世の屋敷「大下屋敷」に関連する堀を検出。 |

高崎市文化財調査報告書第334集

柴崎屋敷遺跡

－宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成26年6月25日印刷
平成26年6月30日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／有限会社毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社